

困難にして往々破壊することあれば決して劇しく取扱ひをなすべからず之れを封ずる際物體硝子の代りに稍大形の蓋硝子を用ふる時は裏面より鏡検する際に甚だ好都合なり蓋硝子の下に猪毛或は紙片を入れて強壓を防ぐこと肝要なり若し胚子稍長大にして全標品となすに適せざるものなればピクロ硫酸に二三時間漬け置き七十度酒精にて全く黄色を脱する迄洗ひ後酒精中に貯ふべし昇汞にては稍長大なる胚子を固むる時は内部に徹らざるなり卵を割るには其太き端より剪刀にて切り始め内容が容易く出で得る迄切り擴ぐべし

●三崎通信

例に依り當春季の休業中にも三崎臨海實驗場は開かれぬ三月廿四日午後會田龍雄、渡部久吉の兩氏は先着として上陸す場内の準備と實驗丸の艤装に此半日を費せり夜に入り藤田經信氏三浦半島を陸行して場門を叩き來る

明る廿五日も天氣晴澄のことなれば拂曉床を蹴て起ち波靜なる春の海に新しき上曳網を下したり當年は氣候尙冷

かにして温潮は遠く二三里の沖に在り獲る所饒ならず微細の甲殻類のみ夥多にして矢蟲や傘水母は殆ど皆無と謂ふべく之を當て込みて來場せる二氏の失望一方ならず廿六日天候頓に變じ妖雲四方を塞き加るに微雨の襲ふありて終日梅雨の候の如し雨を冒して表面採集を行ひ鬱窓の下に之を檢査して日を送れり、斯の如くして廿八日に至るも霖雨未だ霽れず不快極りなし某氏の如きは陰かに日和坊主を造りて晴を祈れり其効驗にや翌廿九日暗雲四散初めて富嶽を西天に望む某氏欣喜の情制し難く坊主に酬るに酒精一滴を以てす而して後之を火中に投ず偶々坊主の怒に觸れしや翌卅日天候再び搔き曇り一行落膽地に塗る計り此間流石の藤田氏はアメフラシの卵を多く採集保存せり會田氏は無據鳥賊の卵を收獲せり水漕の中幼胚發生し豆大の鳥賊の子蛋白塊を突き破り突進して遊び出でしは一奇觀を呈したり渡部氏は多少の浮游動物を集め水臈水母計九種を認めらる卅一日雨止む港の東口女皇礁の邊に臨汀採集を試む會田氏ボドコリネと稱するヒドロゾ

明治三十四年四月十五日

三崎通信

第五卷

一六二

アを採集し藤田氏アルヒドリスと名くる隱鰓類を獲、渡部氏連りに同所に多き綠色紅條の菟葵を檢査し七十個の標本に就て條紋の數の變化を觀察せらる此日文科大學々生一人來訪す

日は移り月は改るも定めなき春の空は今日は碧天明日は暗雲交々遷りて誠に一行のために不幸なり當四月一日は昨日より引續きたる晴天にて矢蟲一新種と傘水母一個漸く天の授くる所となり人々前途に大に望を囑して拍手の中に沖の方を詠むれば十錢丸舷上高倉卯三磨、西川藤吉兩氏の影を認む汽船の入津に先つ事半刻藤田氏出發歸途に就けり之より先き高倉氏は單騎下總銚子に赴き紐蟲の採集に従事せしが今や歩を轉じて三崎に來る途次姥貝數個を齎らし其中に紐蟲の潜息せるを信し居たれば翌二日早朝之を解綻す何ぞ圖らん各個貝殻の中紐蟲の片影だも發見せず噫吁流星光底逸長蛇、同日更に雨となり表面採集者も亦天を仰て再び長嘆息す西川氏海藻に附着するワレカラを採集す

明れば三日神武天皇祭の嘉辰なり早曉霹靂雷轟き暴雨一瀉天地を掃ひ忽ち晴空を見る南風徐に吹て氣朗かなり則ち一行相謀り午前の課業を終へたる後此佳辰を祝して城ヶ島に遊ぶ此日當地の慣例として老幼子女相携へて所謂花見の興を催せり高倉氏乃ち平素の妙技を振ひ狂醉亂舞の狀を寫眞す同時一行中の某氏も亦不意打ちの撮影を受け甚た迷惑せるも可笑し歸途南風烈しく辛して艇を回すを得たり

四日渡部氏終日舟に坐し港の東口を横斷して専ら上曳を力む午後四時沛雨來襲乃ち舟を返す五日天晴朗復たく朝に表面採集を行ひ午刻汐の退くを待ちて高倉、會田、西川三氏相伴て城ヶ島の東隅にカマクヅシを採集す寺崎留吉氏來着す夕刻一通の電報大學より來る報に曰くラブカの孕めるもの教室に着すと西川氏即ち之か卵胚を得んと欲し勇を鼓し即時結束歸途に上らんとす夜に入りて漁夫復た一頭の雌ラブカを當實驗場に寄す之を携ふる西川氏の得意一方ならず拍手雀躍の中汽笛一聲同氏及會田氏別

動物學雜誌 第百貳號

を惜みて去る

六日天稍曇る朝渡部、寺崎兩氏上曳を行ふ多く矢蟲を得たり奈何せん會田氏已に去て居らず風雨屢々侵し來る工科大學々生一人來訪す七日晴朗北風軟かなり高倉氏陸路歸京す此日晝夜上曳をなす夜間の採集殊に渡部氏に趣味を與ふ蓋し多數の *Pyrocypis* (發光シブリヂナ) を獲たるも夏日と異なり一も發光するもの無し氏の説に由れば發光素は皆紅色に變質し居れりと云ふ此夜弦月西天に懸り金波動搖す此光景名狀す可からず來訪者一人高等師範學校生なり

八日天益々快晴風雲更に起らず寺崎氏専ら上曳の動物を學ぶ原十太氏不日來遊の報あり夜に入り溼雨沛然盆を覆すの勢あり之より九日夜迄風雨烈しく怒濤轟々として夜安眠するを得ず十日碧空洗ふが如きも西南風強威を極め港内泥波を捲く此間辛ふじて二回北條入江に泥水中の上曳をなす午後藤田氏再び來遊す翌十一日渡部寺崎兩氏曉起陸行歸途に就く

以上當春期の模様を略ぼ誌したり之を要するに本年は雨多くして海水沖に向て流れ沖合の動物來集せず獲る所極めて鮮し之を夏日水温二十六度(現今港内水温十四度)の頃に較ぶれば實に霄壤の差異ありと謂ふべし聞く所に由れば當時の特産として注意すべきは硅藻類の螺旋狀に連續せるものにして其長さ半センチに及ぶもの頗る多く港内の海水をして濁黄色を呈せしむるものは即ち現今主として此の藻類の色素に起因するものなりと謂ふ又俗に汐腐れと稱する帶紅白濁様の絲狀海藻あり三崎近海にては春日落花の如く海面に漂流するものにしてプランクトン學者の留意檢査を経べきものなる由又沖の動物にて放射蟲の復合體は四月三日南風以來可也多く上曳網にかゝれりと云ふアツペンデクラリアはいつも多量に港内に生息す管水母の幼きものには種々のステージあり、ドリラルムも罕に見るべし矢蟲も稀少にしてカサクラゲは更に稀れなり沿海の浮游動物には介形甲殼類等脚甲殼類、海膽のプロテウス幼蟲、水螅水母を主とし多毛類の幼蟲は

明治三十四年四月十五日

札幌博物學會記事

第五卷

一六四

極めて少なし

連日陰雨徒然の餘り某氏思はず嘆息して口吟するを聞けば曰く

我かものと思へば見たしかさ水母、上曳網を肩に掛け、三崎へ行けば春の日の、眞潮はいうによりもこず、待つ身につらき實驗所、ほんに遣る瀬がないわいな阿々

(T、T、生)

●札幌博物學會記事 第五十八回月次會は一月二

十三日午後一時半より札幌農學校植物學教室に開き第一席菊池幸次郎氏は銹菌類の寄主に及ぼす變化と題して *Aecidium Urticae*, *Caeoma Mori*, *Gymnosporangium clavariaceae*, *Caeoma deformans* 等の各其寄生主イラクサ、クハバクシン及アスナロの組織に及せる變化は Wakker 氏の説ける如く sklerenchyma, collenchyma 及材質部に於ける mechanical elements を缺如するか若くは其發育甚た不完全にして parenchyma の發育盛に且つ其細胞著しく擴大し往々綠葉素を缺き澱粉粒を多量に含有し cutinum

cuticle の結晶を生ぜずと述ベアスナロの天狗巢に付ては殊に其分枝の狀態及成長點の發生を説て曰く畸形枝の成長點は常に其先端にあるも其細胞の分裂及發達に遲速ありて周圍は迅速に中央は緩慢なる爲め凹字形を呈するに至り成長點は兩側及中央の三個所に分離し兩側の者は成長して終に其頂端皿狀となりて胞子を生じ中央のものは越年して翌年新梢を生ずるものなりと第二席徳淵永治郎氏は蘇鐵の珊瑚狀根の性質に就てと題し氏が盆栽の蘇鐵に於て採集せし所の所謂珊瑚狀根に就き實驗せる肉眼上及顯微鏡上の所觀を實物及圖を以て説明し地上に於ける根には大概楕圓形にして膠膜極めて薄き藍色の藻類を發見す是常に環狀をなして皮部組織内に密生せり是 Reinke の *Anabaena Cyathocarpum* にして Schneider に從へば普通の *Nostoc communis* と同種なりと而して斯變形せる根にして地中に存するものには通常此藻の存在を認めざりと陳述し尙ほ此他バクテリアの存在を説き更に此變形根は兩叉狀に分支し且つ陰性向地性なると寄生植物と此藻